

中西遺跡第18次調査

～弥生時代前期水田の調査～

【はじめに】

弥生時代——歴史の教科書にも書かれているように、わが国における農耕社会が幕開けする時代として知られています。弥生時代から農耕（＝稲作）が始まるという説は、奈良県出身の考古学者森本六爾がとなえ、森本の死後、昭和11・12年に行われた田原本町唐古遺跡の発掘調査で、大量の木製農耕具が出土したことによって初めて証明されました。しかし、県内では稲作の直接的な証拠である水田遺構が長らく確認されなかったため、その実態はよくわからないというのが実情でした。このような状況にあって、2008年に行われた橿原市萩之本遺跡の調査で弥生時代前期にさかのぼる水田遺構が確認されるなど、弥生時代の水田遺構の事例が徐々に明らかになり、県内においてもようやく弥生時代の稲作の実態を解明する手がかりが得られるようになってきました。

【調査成果】

今回の調査で確認した水田遺構は、弥生時代前期（約2,400年前）にさかのぼると考えられます。検出した遺構には、大畦畔・小畦畔・水路・島状高まりなどがあります。水田は高さ5cmほどの小畦畔で3×4mほどの範囲を方形に区画し、それをいくつも連ねることで面的な耕地を造成する「小区画水田」とよばれるものです。区画の数は、実に850枚以上にもなります。このように、一つの水田を小さく区画するのは、より少ない労働力で、水田に水をはるために必要な平坦面を造成するための工夫であるといわれています。また、水田の造成方法は、まず小畦畔を南西―北東方向を基本ラインとして削りだし、次いでこれに直交する小畦畔でさらに区画しています。このため、後者の方が前者より畦の高さが低くなるという構造になっています。なお、小畦畔には、ところどころに途切れたところがみられ、ここが水口になっていたと考えられます。このように、基本的な配水手法は、畦越しによる掛け流しであったといえます。ただし、調査区のほぼ中央には、水路として機能したと考えられる溝もみられることから、このような水路も併用しながら、可能な限り合理的に配水することを意図していたと考えられます。

【まとめ】

今回の調査では、調査区のほぼ全域にあたる約10,000㎡に及ぶ水田遺構を確認することができました。また、中西遺跡の調査では、第14・16次調査でも弥生時代前期の水田遺構が確認されており、周辺調査を合計すると耕地面積は約20,000㎡以上の広がりをもつことが明らかになりました。これは弥生時代前期の水田としては、滋賀県服部遺跡、大阪府池島・福万寺遺跡などを越す規模であり、調査地周辺が国内有数の穀倉地帯であったことを示していると考えられます。現時点では、この水田を営んだ人々が居住した集落は確認されていないので、まだまだ解明しなければならない課題も多く残されているといえるでしょう。しかし、大和はのちの古代国家成立の地であり、その成立の背景の一つとして、早くから稲作を中心とする安定的な経済基盤を構築することができたという社会的・経済的環境が寄与した可能性が高いと考えられます。このように、中西遺跡における弥生時代前期水田の発見は、単に初期農耕の様相を解明するだけでなく、より広い視野での研究に寄与する重要な調査成果になったといえるでしょう。



中西遺跡
第18次調査
～弥生時代前期水田の調査～

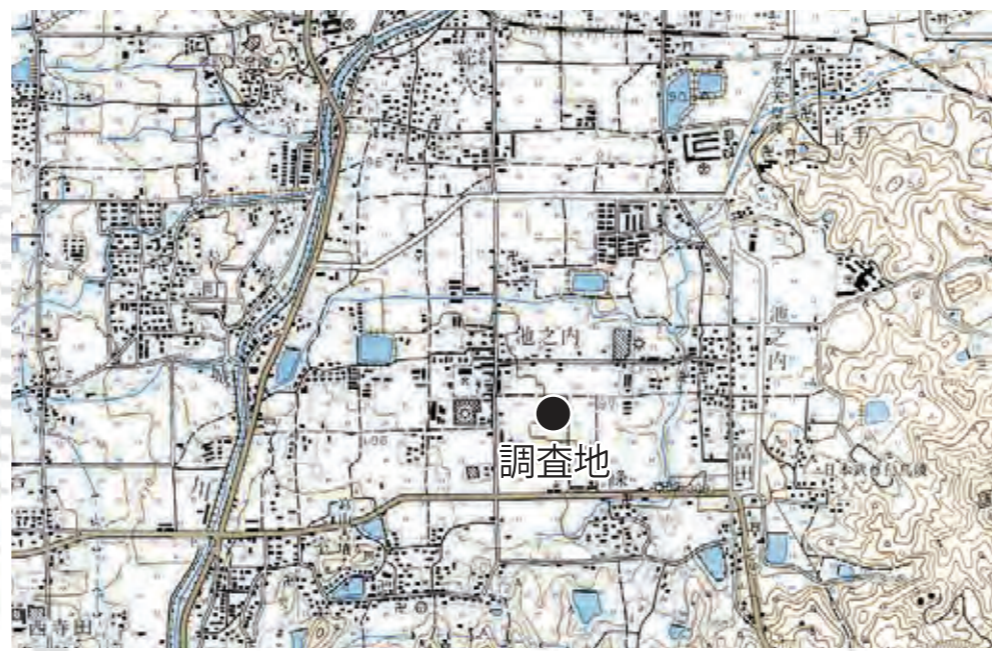
平成23年11月12日
奈良県立橿原考古学研究所
〒634-0065 奈良県橿原市畝傍町1番地
電話:0744-24-1101(代表) <http://www.kashikoken.jp>



2011年11月12日

奈良県立橿原考古学研究所

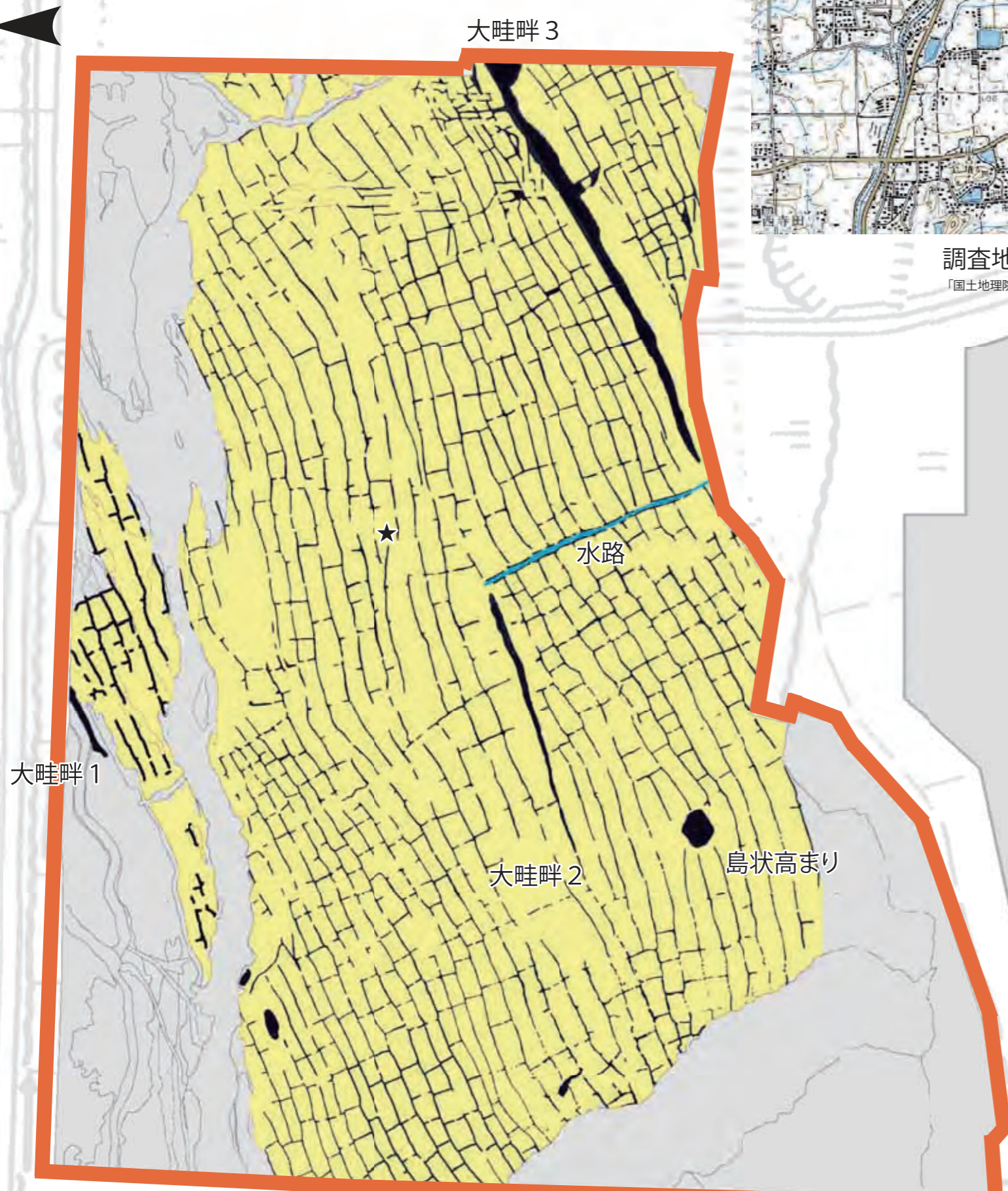
中西遺跡の水田全体の様相



調査地位置図 (1/25,000)
「国土地理院発行1/25,000地形図(御所)を使用」



調査地全景 (南西から)



第18次調査区(今回の調査地)

★:石庖丁出土地点